

平成 29 年度 事業報告書

1. 河川の環境保全活動

A) 保津川クリーン作戦【継続事業】

今年度も亀岡市内の各自治会や企業、行政との協働により保津川クリーン作戦（毎月第 3 日曜日）を実施し、河川環境美化に務めた。特に京都府南丹土木事務所や亀岡市などと一緒に組む「川と海つながり共創プロジェクト」（以下、川海 PJ）との連携を強化し、「保津川の日」をはじめとした各イベントを実施することで、市民に向けた働きかけを強化した。また、昨年度からの継続としてアウトドア茶会（カジュアルスタイルの野点）と清掃活動を融合したイベント「保津川 de 大茶会」を、保津川遊船企業組合や聖護院八ツ橋総本店との協働により 5 月 20 日（日）に実施した。



清掃活動の参加者数は、天候不順による中止が 3 回あったにもかかわらずのべ 1,256 人にのぼり、20L 土嚢袋×582 袋の漂着ごみの他、大量の粗大ごみを回収することができた。また、引き続き保津川花火大会（8 月）ではエコステーション（ごみの分別回収拠点）を運営し、イベントごみの削減と省資源（リサイクル）をよびかけた他、亀岡市及び亀岡青年会議所と共に、日本初のプラスチックごみゼロの花火大会を目指す取り組みを昨年度より始め、今年度は飲料容器のデポジット制度の実証実験にも取り組んだ。また、川海 PJ とともに京都環境フェスティバルに出展し、保津川の環境保全の取り組みを広く府民に広報した。



B) 河川巡視活動【継続事業】

依然として、保津川流域ではごみの不法投棄や大量漂着が続いている。本事業では、毎月 2 回の河川巡視活動を実施し、ごみの漂着状況を調査し、保津川クリーン作戦の計画立案に反映させるとともに、不法投棄ごみの即時回収を実施した。なお、粗大ごみの回収については、亀岡市環境政策課との協働により取り組んだ。

C) 海ごみサミットへの参加・川ごみサミットの開催【継続事業】

両会議は、主催者の都合により今年度は開催されなかったため、実施せず。なお、今年度

は「河川ごみの削減方策に関するワークショップ」（全国川ごみネットワーク）に参加し、関係省庁や全国の NPO/NGO などとの情報共有を図るとともに、海や川のごみ対策をめぐる国内外の最新の動向について情報を収集した（交付金対象外）。

D) 生き物調査とシンポジウム【新規事業】

本事業では、「100 年先も自然と共存していくまちづくり」をテーマに、それにつながる活動として、広く市民で自然環境調査を実施し、市内の現況を把握するとともに、市民的な議論を深め、自然環境の保全策を講じることをめざし、以下の取り組みを実施した。

まず、河川空間や水田、ため池など良好な水辺・湿地環境の状態を表す代表的な指標生物であるツバメの亀岡市内における巣やねぐらの位置情報の提供を、学校や自治会の協力のもと、市民に呼びかけ、得られたデータを地図にまとめた。調査では、計 340 箇所のツバメの営巣状況に関する情報が寄せられた。さらに、亀岡の豊かな自然の価値を再確認し、生き物との共生をどのように実現するのか、シンポジウムを開催して議論を深めた。シンポジウムでは中貝宗治氏（兵庫県豊岡市長）の基調講演のあと、桂川孝裕氏（亀岡市長）、島田久仁彦氏（K.S. International Strategies C.E.O）、多胡麻衣氏（亀岡子育てネットワーク代表理事）らによるパネルディスカッションを実施し、「ツバメ“も”子育てしやすいまちづくり」の実現に向けた議論を深めた。なお、当日の参加者は 60 名であった。



2. 河川の文化伝承事業

A) 環境教室【継続事業】

本年度も保津川漁協の協力のもと、7月23日に伝統的漁法のひとつ「アユ狩り」や「ゴリ踏み」を実施し、市民に河川環境の重要性や川の楽しさを知ってもらうことをめざすイベントを実施し、100名の参加者があった。なお、1月にはかつて流域で珍重されていた「寒バヤ」や野生鳥獣の肉の食文化を体験出来るイベントの開催を予定していたが、不漁により食材の調達が困難であったため、中止した。（なお、野生鳥獣の肉の食文化体験については3月11日にツアーとして実施した（交付金対象外））



B) 保津川筏復活プロジェクト【新規・継続事業】

保津川筏復活プロジェクト連絡協議会（京筏組）や京都学園大学、亀岡市内の各自治会との協働のもと、保津川の筏流しの復活に向けた取り組みを進めた。6月には保津川の筏流しの歴史を伝えるイベント「森と川をめぐる冒険」、9月には筏に試乗できるイベント「いかだにのってみよう！」を予定していたが、台風による森林の荒廃や、増水のため中止となった。12

月には、嵐山で60年ぶりとなる12連筏の再現に取り組み、京都学園大学の協力を得て、筏の操縦法の解析を進めた。さらに、間伐材の有効利用と筏流しの文化的価値の向上を目指して、筏流しに用いた材木を用いた商品開発（試作）に取り組んだ。

